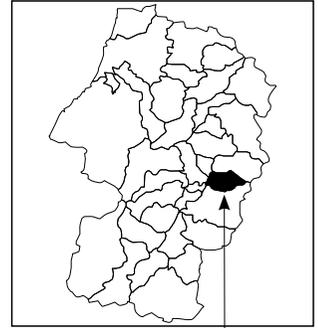


トピックス

天童木工の家具づくりのあゆみ

加藤 直樹



山形県

天童市

はじめに

山形県の東部に位置する天童市。手彫り将棋駒の出荷量が日本一を誇り、西洋梨のラ・フランスやさくらんぼの生産が盛んで、温泉でも知られている。そんな豊かな土地に天童木工の本社工場がある。木製家具メーカーとして、イスやテーブルなどの規格品から、書架や議場家具といった特注品まで、多種多様な家具を生産している。中でも木材を自由なかたち成形できる「成形合板」技術を得意とし、後の名作と呼ばれる数多くの家具をデザイナー達と生み出してきた。

家具メーカー天童木工のはじまり

① 戦時下の仕事

天童木工の創業は1940（昭和15）年のこと。戦時中、いわゆる軍需品を製作することを目的として近隣の大工や建具、指物などの職人が集まり「天童木工家具建具工業組合」が組織された。戦争が激化する中、若者たちの中央への流出を防ぐことも結成の狙いのひとつだったとも言われている。当初は弾薬や機械を入れる木箱が主な生産品だったが、戦争末期にはアメリカ軍航空機の誤認を誘う「木製おとり飛行機」を製作することもあった。簡単な木箱の製作だけでなく他の高度な仕事もしたいと考えていた当時の工場長の加藤徳吉が仙台に存在していた国立の機関「工芸指導所」に相談を持ちかけ、受注した仕事であった。

おとり飛行機の製作指導を工芸指導所から受ける際に出会ったのが、後に多くの影響を受けることとなるデザイナーの剣持勇氏である。工芸指導所に技師として籍をおいていた彼に、おとり飛行機製造の技術指導をうけたことが縁の始まりであ



※木製おとり飛行機（1945年）

った。その後、10機ほど製作され、土浦の海軍航空省に納入された。当時の金額で1機あたり5,000円程度だったという。

② 家具づくりのはじまり

戦争が終わり、木箱等の製作用に在庫していた大量のスギ材が残った。それらを活用して作られたのがちゃぶ台や茶ダンスなどの生活用品である。品物の良さに全国的な評判を獲得し、平和産業への転換を果たしたのであった。

その後、アメリカの軍隊が日本各地に駐留を進める中、国を挙げて彼らの住宅をつくることになった。必要とされる家具を全国各地の家具メーカーが作ることになり、天童木工も名を連ねていた。いわゆる「進駐軍家具」で、4つ脚の構成を主とする西洋家具の製造のはじまりである。

その際の製造指導にあたったのが、前述の剣持勇氏と、同じく工芸指導所に在席していた豊口克平氏であった。剣持勇氏と豊口克平氏は戦前、来日していたドイツ人建築家のブルーノ・タウトに師事し、規範原型による椅子の製作などを通して家具研究を学んでおり、その後の家具業界に大きな成果と躍進をもたらすこととなる。特に剣持氏は製品検査のため当社の工場まで派遣されていたことから、より縁が深まることになった。進駐軍家具は同じかたちを大量に製作する必要があったため、量産方法や、機械加工の効率化など、その後のコントラクト家具（特注品）の製造にも大き